

モディ政権下における ヒンドゥー至上主義者たちによる 批判的学者への攻撃 ——雑誌 Frontline の記事から——

馬内里美*

Hindu Nationalists' Attacks
on Critical Scholars
under the Modi Government
-From the Articles in Frontline-

MAUCHI Satomi

1 はじめに

本稿は、拙論「モディ政権下の高等教育機関へのヒンドゥー・ナショナリズムの介入 - 雑誌 Frontline の記事から -」(2017)に続くものである。

2014年5月のインド人民党(Bharatiya Janata Party, 以下BJP)を中心とした連立政権発足以来、ナレンドラ・モディ (Narendra Modi) 政権は、新自由主義経済による経済改革を訴えながら、同時にヒンドゥー・ナショナリズム的価値観をあらゆる分野で広めようとしている。教育は重要な分野とみなされ、任命権を通して高等教育機関に介入する動きが見られる。拙論では、政権に批判的な人物を解任し、代わりに資質を欠いているが政権寄りの人物を任命する事例を取り上げた。さらに、高等教育機関において反政府的な団体への

* 東北文化学園大学総合政策学部准教授

攻撃や排除が、直接または間接的な政治的介入を通して行われる事例も紹介した。これらはヒンドゥー教に基づいた国づくりを目指す運動の一環である。

本稿では拙論に続き、雑誌 Frontline の記事を中心に、学問と教育分野における、ヒンドゥー・ナショナリズム推進団体、民族奉仕団(Rashtriya Swayamsewak Sangh, 以下 RSS)の傘下組織による介入および攻撃を紹介する。BJP も RSS を親団体とする政党組織であり、BJP 政権下で彼らの運動は一層大胆になっている。

本稿では、ヒンドゥー至上主義¹⁾運動の一端を、批判的学者に対する攻撃事例を中心に紹介する。標的とされた批判的学者にはノーベル経済学賞受賞者アマルティア・セン (Amartya Sen) も含まれる。さらに伝統医学を現代に生かそうとする疑似科学的な運動も紹介する。いずれも、内向きにインド中心史観に依拠しながら、外部からの批判には脅しで対応しようとしている。偏狭なヒンドゥー至上主義へ鋭い批判を行う学者、作家には、嫌がらせや脅迫を受ける人々も、さらには凶弾に倒れた知識人やジャーナリストもいる。一方で、ヒンドゥー至上主義運動は米国などのインド系移民のなかで活発化している。国内外の団体が連携し、かつ現代的手法を用いながら、盲目的な信仰心に基づいた運動が国内外の支持者向けに行われている。

2. アマルティア・センとナーランダー大学

アマルティア・センは、連邦政府で連立政権、国民民主連合(National Democratic Alliance 以下 NDA)を率いる BJP の政治および政治政策に対する批判を続けてきた。エッセイ集『議論好きなインド人』(原題 The Argumentative Indian)で、彼は多様性と議論を重んじるインドの知的文化の伝統について幅広く論じている。背景には、この伝統が脅威にさらされている危機感があり、ヒンドゥー至上主義政治を唱える人々による偏狭なヒンドゥー教理解および BJP の政策を、彼は批判する。2004年 NDA 選挙敗北後

1) なおヒンドゥー・ナショナリズムを、本稿では「ヒンドゥー至上主義」とすることもある。ヒンドゥー至上主義は Hindutva 「ヒンドゥットヴァ」の訳語であるが、V.D.サーヴァルカル(Vinayak Damodar Savarkar)が1923年に同名の著書で提起した造語である。原義は「ヒンドゥー性」、「ヒンドゥーの本質」であり、インドをヒンドゥーの国とみなす排他的なヒンドゥー・ナショナリズムであり、その背後にあるのはムスリムの排除である。ほぼ同義であると考えられるが、インドでヒンドゥー・ナショナリズム以上に使用されているため併用する。

の8月15日(インド独立記念日)付けのまえがきで、論考の約半数は「ここ数年間」に書かれていると記しているが、第一次 NDA 政権時期(1998年～2004年)と重なる(セン [2008], pp.1-2)。

一方、BJP もセンを疎んじてきた。それがナーランダー大学における人事の干渉である。センの描く多様性と議論を重んじる知的伝統の象徴の一つである古代ナーランダーが現代の大学院大学として復活するのに、センは大きな役割を果たした。だが2015年センの学長再任がインド政府によって承認されず、彼は任期満了での学長辞任を表明した。さらに翌年、政府が大学運営委員会を再編し、センをはじめとする多くの委員が交替させられた。

2007年のナーランダー大学設立決定は、汎アジア的イニシアチブの結果として生まれた。シンガポールで開催された展示「ナーランダーの道」が契機となったが、当時のシンガポール外相、ジョージ・ヨー (George Yeo) の果たした役割は大きく、大学設立のメンター集団の一人となった。このように大学設立を主導したメンター集団の構成は国際的であった。センはインド大統領からの依頼でメンター集団の議長を、そして大学創立以降は学長を務めた。歴史学部と生態学・環境研究学部の2学部で、講義は2014年に開始された。その後、地元のニーズによる経済学部、ほかに公衆衛生学、仏教研究・哲学・比較宗教学部も検討された²⁾。2014年初頭に当時の首相、マンモハン・シン (Manmohan Singh) はナーランダー大学の運営経費の負担を2021年まで約束、また完全な学問の独立も約束した(セン [2016], pp.273-280)。

しかしながら、同年5月の総選挙でシン政権は敗北し、モディ政権が誕生した。新政府と大学運営委員会の関係もこじれてきた。2015年1月、センのナーランダー大学学長継続が運営委員会において全会一致で決定された。正式承認は「政府の助言に従って行動するしかない」参事であるインド大統領の承認によるのだが、一か月以上返事がなかった(同上, pp.280-282)。

センは運営委員会あての辞任表明の手紙を公開した。彼は謝辞とともに、次のように書く。政府に原則として行為、または非行為の権力がある場合、政府による非行為は運営委員会の決定を覆すための時間稼ぎである。運営委員

2) 同大学のホームページによると、新たに設置したのは、仏教研究・哲学・比較宗教学部である <http://www.nalandauniv.edu.in/about-nalanda/governance> [2017/11/29アクセス]

会が満場一致で通した改正規約の際にも、外務省からの正式な承認も却下もなされなかった。政府が学長職辞任を望んでいると結論づけざるを得ない。人事の遅れは大学運営上支障となるため、任期満了をもって辞職する。さらにセンは、政府がナーランダー大学の国際的な性格を評価せず、多国的な運営委員会³⁾に適切に注意を払おうとしないことに対する運営委員会の懸念にふれた。また、政府が早急に、しかもインド議会によるナーランダー大学法規定に違反して運営委員会全体を再編しようとした試みにおいて、当の運営委員会が蚊帳の外に置かれていたことに言及している (Sen [2015])。

エッセイ、「ナーランダー大学について」でセンは、政府が学術的リーダーシップに介入した例として、インド歴史研究評議会 (Indian Council of Historical Research, 以下 ICHR)⁴⁾、インド文化関係評議会 (Indian Council of Cultural Relations, 以下 ICCR) 等をセンは挙げる。学長人事に関し、ヨーをはじめとするほかのアジア諸国出身の知識人が運営委員会に多いこともあり、宗派的押し付けの回避に成功し、また批判的な世論を集められたことに、センは満足しながらも、学問の独立性に対して、懸念を示す。「ヨーが必要となる独立性を与えられるという私たちの期待に政府が応えてくれるのがきわめて重要となる。そうでないと、ナーランダーは ICHR や ICCR に続いて宗派性の道に陥ってしまう」(セン [2016], pp.283-286)。

だが、翌年2016年11月、政府介入による運営委員会再編が、学長ヨーに連絡もなく行われ、センを含む数名は委員を外れた。ヨーも中央政府による大学独立性への侵害を理由に、学長を辞任した。これは、11月に任期が切れる副学長選考中のことであった。政府は当時の運営委員会に副学長選考を任せたくないため運営委員会を再編した、と指摘されている (Tripathi [2017])。

2015年2月にセンが言及した運営委員会内の懸念が、現実のものとなった。また、再編後新たに加わった委員には、センが宗派的な人事として批判した ICCR の議長、Lokesh Chandra も含まれている。センによると、彼はモディを「神の生まれ変わりだ」と公言している (セン [2016], p.285)。一方、大学によ

3) センの手紙で言及されている運営委員会には中国、日本、シンガポール等からの代表者が上げられている。一方、現在の外国の代表として挙げられているのは、中国、オーストラリア、ラオス、タイである。

4) ICHR の宗派的な人事については馬内 [2017] ,p.163 参照。

ると Chandra を「高名な学者または教育者」として運営委員会に加えている⁵⁾。

国際的な大学をインド的大学へと作り変える変革は進み、結果として大学は高等教育機関として混乱に陥っている。著名な教員も幾人か大学を去り、カリキュラムも雰囲気も大きく変わった。2016年に開設された仏教研究・哲学・比較宗教学部に第1期生として入り新年度始めに辞める学生によると、大学執行部は外国人教員に対して懐疑的で、結果として特に海外の教員が去り、教員不足に陥っている。それに伴い、研究計画を遂行できなくなる学生もいる。また、当初は研究志向を強調していたが、突然、試験導入を発表するなど、カリキュラム変更に学生も当惑し、少なくとも6人以上の学生が退学した。大学の変化は特に2017年3月に Sunaina Singh が副学長として加わったときから顕著になったという (Chowdhury [2017])。

2017年7月、The Central Board of Film Certification⁶⁾ (以下 CBFC) は、センの業績と人となりに関するドキュメンタリー映画 The Argumentative Indian のなかで、「牛」、「グジャラート」、「ヒンドゥー」、「ヒンドゥットヴァ」の言葉の削除を上映条件とした。制作者 Suman Ghosh は削除を拒否し、インド国内ではインターネットのみで視聴可能となった。Ghosh は制作を2002年から開始し、時代の変化にセンの意義を再認識し2017年初頭にも新たに撮影した。2002年はモディ首相が州知事を務めていたグジャラート州で暴動のあった年であり、牛屠畜業への攻撃はモディ政権発足以降深刻な問題になってきている。Ghosh によれば、CBFC は納得のゆく説明をしなかった。削除要請は政治的であり、インド国憲法で保障されている表現の自由の侵害であると知識人たちは批判している。センは BJP に対して批判的であり、数年間彼は BJP の攻撃の対象になってきたが、この干渉に関して BJP 内でも批判する者もいる (Chattopadhyay [2017], pp.103-106)。

5) <http://www.nalandauniv.edu.in/about-nalanda/governance> [2017/11/29 アクセス]

6) 2015年1月、BJP 支持者の Pahlaj Nihalani が CBFC の理事長として任命された。すでにほかの理事も BJP 支持者たちで占められている。Nihalani は、映画界における特筆すべき業績はないが、2014年議会選挙でモディの選挙運動用動画製作で注目を集めた人物である (Katakam [2015] pp.41-43)。

3. ヒンドゥー至上主義者による別のヒンドゥー教史への攻撃

2014年2月、出版社 Penguin Books India は、元学校長で、Shiksha Bachao Andolan Samiti（教育を救えキャンペーン、以下 SBAS）を率いる D・バトラ（Dinanath Batra）が2011年に起こしていた民事訴訟で SBAS と調停に入り、問題とされた本の撤収・パルプ処分を決定した。その書物は、インド学者でシカゴ大学宗教史学部の Mircea Eliade Distinguished Service Professor である W・ドニガー（Wendy Doniger）による The Hindu: An Alternative History である。インドで2010年に出版されると、バトラは数か月以内に刑事告訴し、その後2011年に民事訴訟（地方裁判所で未決）、13年に再度刑事告訴した。Penguin は数年にわたり本を擁護してきたが、判決を待たずにヒンドゥー右派に屈することになった。著者や学者の表現の自由に対する反対者によって、いかに法規定が濫用されうるのか浮き彫りになった（Venkatesan [2014] ,p124-125）。

右翼の脅迫に対する出版社の臆病に対し、ソーシャルメディアでは、リベラルたちが抗議の声をあげた。

宗教感情を傷つけるとして作品や作者が非難されることは、今回の件が初めてではない。例えば、画家の M.S. フセイン（Maqbool Fida Husain）は、描いたヒンドゥー教の神々の絵により宗教感情を傷つけられたと非難され、2006年に亡命し、2011年に亡命先で亡くなった。サルマン・ルシュディ（Salman Rushdie）は著書『悪魔の詩』（The Satanic Verses、訳者五十嵐一は1991年に何者かにより殺害された）でイランの最高指導者の怒りを買ひ、1989年に死刑宣告を受け、潜伏生活を続けた。

Penguin Books India は、表現の自由の擁護と同様に、活動する土地の法律を尊重する義務を負う、また脅迫や嫌がらせに対して従業員を保護する道義的責任を有すると表明する。そのうえで、インドの刑法、特に第295条 A により、インドの出版社が表現の自由の国際的基準を維持するのは困難である、と弁明する。

バトラによると、SBAS は各地に委員会があり、学校や大学の教科書を調査し、インドの「文化的・精神的遺産」に沿わないと考えられる本を探し出し、闘う方策を議論している。さらに、ヒンドゥー教徒の感情を侮辱し事実を歪曲していると思われるものに対して、州レベルで関心を喚起し訴訟を起こし

ている。このように原理主義者たちは、「感情を傷つけられた」ことを理由に、脅しと暴力を手段として、知に対抗し自由な思考をつぶそうとする (Trivedi [2014a], pp.121-123)。

ヒンドゥー右派を厳しく批判してきた A.G.Noorani は、バトラの訴訟は、言わば玩具の銃を振りかざしただけで、民事、刑事両訴訟で成功する見込みはない、訴えは却下されるべきであった、と主張する⁷⁾。出版はインドの刑法第 295 条 A に抵触しない。同条では、インド市民のいずれの階級の宗教感情を憤激させる故意でかつ悪意のある意図をもち、その階級の宗教または宗教的感情を侮辱、または侮辱しようとする試みは処罰される、とする。つまり、悪意の意図を証明する必要がある。バトラにはドニガーの悪意の意図を証明できないはずである。原告の申し立てが提出されたとしても高等裁判所で棄却されるべきである (Noorani [2014], pp.100-103)。

ドニガーは、前書きで著書の意義を述べる。第一に、サンスクリット語で形成されたものとは別の語りに焦点を当てる。すなわち、高位カーストのヒンドゥー教徒男性の視点とは別の異なる宗教、文化、カースト、また動物、そして女性の視点である。伝統において、抑圧され、沈黙させられ、役割も有していなかったとされる諸集団のヒンドゥー教への寄与を、日常語の文献を通して描く。また宗教の語りを歴史の語りの中に置く試みにより、ヒンドゥー教が政治的、経済的な場で、インドに入ってくる多宗教、多文化の人々との間の出来事に、いかに応えてきたかを描く (Doniger [2010], pp.1-4)。

ドニガーは、2014年5月に The New York Review of Books で、著書の騒動について India: Censorship by the Batra Brigade というエッセイを発表している。インドの法律では、宗教的感情を激憤させることが予期されるだけで有罪となる、として一番の原因をインドの刑法とし、次にヒンドゥー至上主義者たちを批判する (Doniger [2014])。

ドニガーによると、バトラは、ヒンドゥー教には核となる原理があり、それは不変であるとする。歪曲や逸脱を、不変の原理と同等視し混同している、として彼は彼女を非難する。しかし、彼女は、ヒンドゥー教史理解において逸脱した歪曲は大いに意義がある、と主張する。彼女は、醜悪な異端、多神教、土

7) 本件の法律に関しては、Venkatesan [2014] 参照。

俗的な神話などとして蔑まれてきたヒンドゥー教の表象を研究してきた。これは膨大な口承、地方語によるもので、高カースト男性エリート集団からは蔑視されてきた。だが、ヒンドゥー教は女性たちや低カーストの人々の声によって豊かに活気を与えられてきた。これが「別の」ヒンドゥー教であるが、それはヒンドゥーヴァという原理主義的運動において否定されている (Ibid)。

インドではわずかな例外を除いて、学問としての宗教学が確立されていないことをドニガーは指摘する。同意しない書物に対して論議するのが学者の意義であるが、冒涇だとみなした書物の禁書または焚書は、偏狭な信念に基づいている。ヒンドゥー至上主義者は、ヒンドゥー教徒のみがヒンドゥー教を教えるべきだと主張する (Ibid)。

また、ドニガーは、ヒンドゥー至上主義運動が、インド国内にとどまらず、在米インド人にも影響力を及ぼしていることを懸念する。学校教科書におけるヒンドゥー教に関する否定的な記述の書き換え、さらには史実に基づかない神話的記述を要求する圧力団体がある。要求は斥けられているが、出版社がトラブルを避けるために自己検閲を行う恐れがある。また若い学者が議論となりうる恐れのある研究テーマを避ける可能性も憂慮する (Ibid)。

米国ですべきこととして、ドニガーは、インドで表現の自由のために戦っている人々を支援しながら、研究者はヒンドゥー教ロビイストと闘わなければならない。特に若い研究者に危険を冒すテーマ選択を期待できない状況下で、「宗教的感情を逆なで」するテーマを取り上げるのは終身在職権を有する学者の責任である、と結ぶ (Ibid)。

4. ヒンドゥー至上主義者による教育への介入

国家主義的かつヒンドゥー的価値観の視点による歴史の書き換えにおいて、バトラは持続的かつ積極的に活動を行ってきた。ドニガーによると、バトラは、第一次 BJP 政権時の 1999 年に BJP により、学校の歴史教科書全てを「サフラン化」(Saffronize, サフランはヒンドゥー教のシンボル色で、「ヒンドゥー至上主義的イデオロギーに合わせる」の意)プロジェクトに任命されている (Ibid)。後述するが、モディ首相とは彼のグジャラート州知事時代から関係がある。

バトラは、2008 年にデリー大学の歴史学のシラバスから、叙事詩『ラーマー

ヤナ』の様々な翻案に関する A.K.Ramanujan の 著名なエッセイ Three Hundred Ramanayas: Five Examples and Three Thoughts on Translation を外させた。これまでに国立教育研究訓練評議会 (National Council of Education Research and Training, 以下 NCERT) 発行の教科書から「反対すべき」箇所の削除要請を訴え、10件もの訴訟を起こし成功した。Central Board of Secondary Education (CBSE) に対しては、外国語教育を廃しサンスクリット語の必修化、ヒンドゥーの文化、価値観、ナショナリズムを涵養するためのコールセンター開設への圧力をかけている。NCERT のヒンディー語教科書からのウルドゥー語と英語の言葉の削除、CBSE に対して海外団体との協働中止、インドの価値観に基づいたシラバス作成などをも要求している。彼らが大胆に教育に介入するのは、首相に支持されているからである (Katakam [2014], p.121)。

モディ政権下で、運動は一層活気づいている。バトラ率いる Shiksha Sanskriti Utthan Nyas は、教科書の偏向を少なくし、より活気づけるために、5ページにわたる推薦リストを NCERT に提出した。そのなかには、「2002年グジャラートで2000人近くのムスリムが殺された」という記述を教科書から削除すべきというものも含まれている。「暴動について教えて、どのように子どもたちを活気づけることができるのか。剛勇の歴史、偉人の歴史がない⁸⁾。」と、ある RSS の指導者は主張する。彼らが問題あると考える箇所を細かに指摘するが、そのなかにはムガル帝国の寛容な宗教政策や、カースト制度の批判的記述も含まれている (The Wire [2017a])。

政権交代から間もなくして、モディが首相就任前に州知事を勤めていたグジャラート州で、州政府発行の初等および中等学校用補助教材が9冊発行された。インド文化とヒンドゥー教徒としての行動規定に関する本で、うち8冊が

8) 偉人として挙げられているのは、シヴァージー (Shivaji), アクバルに戦で勝ったとヒンドゥー至上主義者の間で知られている Maharana Pratap, ヴィヴェーカナンダ (Vivekananda), チャンドラ・ボース (Subhas Chandra Bose) である。

マハーラーシュトラ教育委員会は7年生から9年生の歴史教科書を改訂し、ムガル帝国統治と建造物に関してわずか3行にとどめる一方で、シヴァージーが創始したマラーター王国の記述を増やした。シラバスの見直しは RSS が推進するシンクタンクの会合で、マハーラーシュトラ教育相とともに論じられた。7年生の歴史教科書の表紙では、インド各地にサフラン色の旗が描かれている。同州の歴史教科書に関する委員会の議長は、マハーラーシュトラを中心とした視点から歴史を見るのは自然であると訴える (The Wire [2017b])。

バトラによる教材であった。彼は、RSSの教育部門 Vidya Bharati Akhil Bharatiya Shiksha Sansthan のトップでもある。バトラによると、2007年の（ヒンディー語での）出版時に、グジャラート州から教科書用に翻訳の打診があり、8冊すべて当時の州知事モディに支持され、彼がメッセージを各教材に寄せている。バトラ以外の人物が書いたもう一冊の教材では、『マハーバーラタ』の Kaurava の百王子の誕生を根拠に、インドで数千年前に基幹細胞研究が行われていた、と描かれている (Katakam [2014], pp.119-121)。

モディ自身も同様の言及をしている。2014年10月、ムンバイの病院で医者たちを前に、モディは古代インドの高度な科学を称えた。その例として、象頭の神 Ganesha や、『マハーバーラタ』の Karna の誕生を挙げて、古代に整形外科技術や遺伝子科学があったと述べた。これに対して反論する医者はいなかった (Trivedi [2014b], pp.97-98)。

著名な古代史家、ロミラ・タパール (Romila Thapar) は、あからさまな非真実に対する学識者の沈黙に、次のように警鐘を鳴らす。「宗教的アイデンティティとその政治に関して、今日撃っているのは特定の宗教に対する、ばかげたファンタジーに基づくヘイトキャンペーンで、私たちはもはや正面切って対峙していない」(ibid, p.98)。

5. インド伝統科学への誇りと科学への妬み

サンスクリット伝統科学の再興について、『ナショナリズムと宗教 現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』で中島岳志は、次のように述べる。

ヒンドゥー・ナショナリストたちは、古代インドを理想的ヒンドゥー社会が成立していた時代と認識し、栄光の過去への回帰を強調する。このような認識から、サンスクリット語とサンスクリットの文化の再興により、国民統合を図ろうとしている。

ヒンドゥー・ナショナリストたちは、インドのあらゆる言語はサンスクリット語に起源をもつと主張する。また RSS は、「サンスクリット語はヨーロッパ諸語の母体である」と言明して、「立証」しようとしている。さらに、それが合理性を極めた言語であり、コンピューター産業分野で用いるべきだと訴える。サンスクリット語の担い手であるヒンドゥーこそが、諸科学分野において先駆的役割を担ってきた、と説く。また、サンスクリット語の普及を図る団体、

Sanskrit Bharati は、インド固有の科学、スワデーシー・サイエンスの先駆性と卓越性を明らかにし、世に知らしめることを目的としてシリーズ本も刊行している。

しかし、中島は、伝統科学を「国民の誇りの源泉」と捉え、ナショナリズムを高揚させる道具として利用しようとするのが、ヒンドゥー・ナショナリストたちの第一義的目的だと指摘する（中島[2005], pp.178-183）。

ヒンドゥー至上主義運動の道具としての「科学」は、むしろ「神話」や「宗教」に近い。いわゆるインド固有の科学への誇りは信仰に基づくところが多い、それに沿わない歴史的事実はヒンドゥー至上主義者にとっては受容し難く、事実を提示されると、彼らの誇りが否定され、相手を攻撃する。

2016年9月、米国に拠点をおく近代科学史の研究者、ミーラ・ナンダ (Meera Nanda) が、雑誌 Frontline に、エッセイ、Hindutva's Science Envy を掲載した。ヒンドゥー至上主義者たちの唱える科学のインド中心史観を、近著 Science in Saffron: Skeptical Essays in History of Science で取り上げた例を挙げながら批判した。代表例として米国在住のヒンドゥー・ナショナリスト、ラジヴ・マルホートラ (Rajiv Malhotra) の名を挙げた。その後、彼の支持者たちにより、カナダやオーストラリアからナンダを個人攻撃する大量の E メールが、本人のみならず、彼女が客員教授を務めていた Indian Institute of Science Education and Research の同僚やインド中の研究機関の研究者たちへ送りつけられた。ナンダはヒンドゥー教の名誉を傷つけようとするアメリカの東洋学の遺産に忠実なセポイである、と断罪する内容である。ドニガーによると、同僚や同分野の研究者にも中傷メールを送り付けるのは、欧米の研究者たちに対する右翼ヒンドゥー教徒の攻撃方法である。彼女にも暴力的でしばしば猥褻な E メールが送られ、また、南アジア研究者たちや彼女の職場であるシカゴ大学の同僚にも送られたという (Trivedi [2016], pp.34-35)。

マルホートラは、インド研究を推進する Infinity Foundation の創始者であり、彼や彼の支持者たちは、ヒンドゥー教多数派の世界観に同調しない欧米の学者を攻撃の対象にしてきた。ウィキペディアによると、彼は、欧米の視点で論じられるヒンドゥー教研究を歴史中心であると批判する。2002年には、Wendy's Child Syndrome という題名のブログを発表し、ドニガーと彼女の影響下の研究者を、フロイドの精神分析をインド文化に応用したと批判する。

また、2011年には、ヒンドゥー教を反科学的であると描いた、とナンダを批判する⁹⁾。

ナンダは、エッセイ、Hindutva's Science Envy において、ヒンドゥー至上主義者たちのあいだで科学に対する妬みと傷ついたプライドが燃り続けていると書く。現代科学は西洋で生まれ、その他の世界に植民地支配を通して広がったという二つの事実は、東洋の誇り高い古代文明にとって恨みに近い苦悩の源泉となってきた。そのなかでもインドほど苦悩しているところはない。現代科学と技術なくして生きることはできない一方で、この強力な知の伝統が、穢れているとみなす melechha (ヴァルナの秩序外に住む外国人) 由来である事実と、折り合いをつけなければならない。科学大国になることに憧れながらも、西洋の歴史的・文化的意義を、物質主義、還元主義、ヨーロッパ中心主義として貶めようとする。この願望、妬み、優越感の融合が、ヒンドゥー・ルネッサンス以来、今日のヒンドゥー・ナショナリストたちに引き継がれている (Nanda [2016], pp.45-46)。

この恨みの最新版は、マルホートラが説く「現代科学をヴェーダの枠組みに組み込むこと」による自分たちの教えの伝統の差異 (優越性) の主張である、とナンダは指摘する。

現代科学はスムリティ (smṛti)、すなわち人間の感覚的知識と推論に基づいて構築されるものであり、それはヴェーダにおける永遠で絶対的な知であるとされるシュルティ (śruti) の下部レベルである、とマルホートラはみなす¹⁰⁾。ヴェーダのカテゴリーの下位セットとして現代科学の概念を翻訳する。例えば、物理学のエネルギーをシャクティの下位タイプと解釈し、物理学をカルマの理論の経験的種と考える。西洋科学をインドの霊的知識の下位の物質界版とみなし、ヴェーダをすべての科学の母とする考え方は、科学への妬みに対する自前の解決策である。この思考は傷ついた文明の誇りを癒すだけでなく、古代文明に科学という箔をつける (Ibid, p.46)。

現代科学をスムリティとみなすことは、大規模に繰り返し行われる科学史

9) https://en.wikipedia.org/wiki/Meena_Nanda [2017/12/15アクセス]

https://en.wikipedia.org/wiki/Rajiv_Malhotra [2017/12/15アクセス]

10) ヴェーダにおいて、シュルティ (天啓) は、神の啓示を聖仙が神秘的靈感として感得したものととして考えられ、一方、スムリティ (聖伝) は聖仙が自ら著述したものである。

の曲解によって助長されている。インドの優越性と神話の原理主義的解釈は事実を歪曲し、さらに、現代科学がすでに我々の過去の聖人たちにより熟考されていたと読み替えるのである。このような考え方を首相が公式の場で表明する。それが専門家から検証されることなく、無批判に垂れ流されるのならば、曲解は際限なく繰り返される。ナンダは、ピタゴラスの定理、ゼロの発見、古代インドの遺伝の考えについてインドで流布する曲解に対し、科学史の立場から半駁する (Ibid, pp.47-52)。

神話と史実の境界を無視し、現在の願望を神話の栄光の過去に読み込もうとする視点においては、インドの古代科学は、現代科学の先駆けとなる。例えば、遺伝子科学はマハーバーラタ時代にすでに存在していた、とモディはスピーチで述べたが、それは単なる政治家によるスタンドプレーではない。優生学用語を用いてカースト制度を正当化するインドの伝統に属している。「遺伝学」という衣の下に隠されているのは、宗教的迷信、経済的利益、カーストおよび性別による偏見に基づく抑圧的慣習の合理化である、とナンダは指摘する (Ibid, p.52)。

彼女によると、ヒンドゥー至上主義闘志たちがこの種の非常識にこだわる背後には理由がある。彼らは、遺伝科学により、輪廻転生が生命現象を説明するのに不適切であることを知っている。バラモンの精神主義的形而上学が、科学の検証に耐えることができないことを知っている。この反啓蒙的形而上学を「科学」として偽装するのは、科学の批判的検証に対する防衛策である。ヒンドゥー至上主義の科学への妬みは、ヒンドゥー教の信仰と慣習の根本を守るための抵抗作戦であり、あがきである、とナンダは結論付ける (Ibid, p.52)。

6. インド伝統科学の応用への試み

ヒンドゥー教において牛は神聖なるものとして崇拝されてきた。現在のヒンドゥー至上主義運動においても、保護を名目として、牛は政治的に利用されている。2015年ウツタル・プラデーシュ州で牛肉を保管しているという噂でムスリム家族が襲撃を受け、Mohammad Akhlaq という男性が殺される事件¹¹⁾は衝撃を与えたが、その後数々の牛保護を理由にしたムスリムおよびダリット襲撃事件は相次いでいる¹²⁾。さらに、いくつかの州では屠畜は禁止され、中央政府も2017年5月に屠畜用の家畜の売買の禁止命令を出している。こう

した動きは、ムスリムへの憎悪を原動力とし、襲撃を正当化し、ムスリムの死傷者がたびたび報じられている。また屠畜や皮革を扱うムスリムに経済的損害を与えている。また乳を出さなくなった牛の処分が困難になり、迷い牛が急増し耕作地を荒らし、さらに未開地に侵入し生態系にも悪影響を与える可能性が指摘されている¹³⁾。

このような牛の政治問題化 (cow politics) の一つに、牛の尿に薬効があるとして医学に応用しようとする動きがある。これは、インド伝統医学やヨーガを推進する政府の方針の一つである。保健省の一部門として1995年に設立されたインド医学とホメオパシー部が、第一次 NDA 政権時の2003年にアーユルヴェーダ・ヨーガ・伝統医学・ホメオパシー部 (Ayurveda, Yoga and Naturopathy, Unani, Siddha, Homeopathy¹⁴⁾、以下 AYUSH) へ改名された。AYUSH は第二次 NDA 政権発足後2014年9月には省へ昇格した。

第一次 NDA 政権時、科学・産業研究評議会 (Council of Scientific and Industrial Research, 以下 CSIR) に対して牛尿効果の研究が要請された。モディ政権発足後、薬効の主張も復活し、Cowpathy (牛療法) なる造語も生み出された。アーユルヴェーダの基礎となる古代サンスクリット経典では、Panchagavya (牛の乳, 凝乳, ギー, 糞, 尿の五品) を処方箋に則った配合で調合したもの、特に尿の摂取は推奨されている。Panchagavya には医学的效果があると、インド農業研究評議会 (Indian Council for Agricultural Research, 以下 ICAR) のインド獣医学研究所 (Indian Veterinary Research Institute) 所属の Kuldeep Dhama たちによる2005年の調査報告は主張した。さらに、外来種と比較して、インド在来種牛の尿が免疫調節機能の点で最も効果的であると述べる。科学的検証データのない疑似科学の主張に、ICAR や CSIR のような政府資金で賄われている組織が関与している。また、タミル・ナードゥ農業大学は有機農業に使うのみならず、実例を挙げて Panchagavya 薬に医学的效果があると謳っている。しかし、これらの論文は科学用語を用いながらも、

11) 牛肉禁止については Frontline Vol.32 No.21 特集 Hindutva's Holy Terror 参照。

12) 屠畜禁止とタリトへの影響については、Frontline Vol.33 No.17 特集 Dalit Upsurge 参照。

13) 迷い牛の増加とその影響については Frontline Vol.34 No.22 特集 Cow Menace 参照。

14) Unani はベルシャ由来の医学、Siddha は南インドの医学。ホメオパシーはドイツ人による代替医療。

論文の体を成さず、ほかの論文で引用されず、類似の発見が報告されない。牛医療だけでなくアーユルヴェーダ医学のほとんどで、現代医学技術による分析、検証がなされていない。インドの薬事法では、古代医学書に描かれている伝統医学に対する臨床試験を除外しているが、アーユルヴェーダ医学の商品化や、牛尿医学研究の特許取得に政府も関わる場合、臨床試験で伝統医学の有効性の実証を科学者が行うべきである (Ramachandran [2016], pp.35-38)。

CSIR は第一次 NDA 政権時に牛尿調合薬の医学的使用に関して米国で4つの特許を申請している。特許自体は使用価値の証明にはならない。CSIR の研究所は RSS 本部の近くにある RSS 関連組織、牛科学研究所 (Go-Vigyan Anusandhan Kendra) と協力して研究を行っている。疑似科学が政治的に推進されているなかで、科学者が合理的に立証し、非合理を取り除くべきだと Ramachandran は結ぶ (Ibid)。

2016年6月にバンガロールの作家と法学教授が The New York Times に Mr. Modi, Don't Patent Cow Urine という意見を投稿した。牛に固執している BJP が牛尿に関して10を超える特許を取得して、CSIR が巨額の資金の特許申請に費やしている。牛尿への特許はヒンドゥー右派の牛への執念の自然な流れであり、インドの科学が西洋科学より進んでいたと主張するのは傷ついたヒンドゥーの心理に頼る国家主義的政党にとってイデオロギー的に理にかなっている。しかし、特許はジェネリック薬品の普及を妨げるとして、悪い経済であると批判する (Prabhala and Krishnaswamy [2016])。

2017年3月、CSIR の商品化部門の CSIR-Tech が特許取得のための莫大な支出により資金不足に陥り、閉鎖を発表した。巨額の政府資金が費やされながら、成果を出すことができなかったのである (Ali and Mohandas [2017])。

7. 結び

本稿で挙げた3人の学者への嫌がらせは、噂の類で標的にされてムスリムが殺される事件と比較すると無害かもしれない。政府が黙認していることもあり、ムスリムを狙ったヘイト犯罪は、大胆不敵になっている。また、屠畜禁止で生業を奪われる多くのムスリムやダリトの死活問題に比べても、深刻ではないかもしれない。本稿では取り上げなかったが、地方政治や宗教組織に批判的な活動家、学者、ジャーナリスト4人が同じような手口で殺されている。

批判の対象がローカルであるほど危険も増す。海外に拠点をおくインド系学者や米国人学者は、地方レベルの利害関係を脅かすわけではない。その点でも、命を狙われるほどの危険は少ないだろう。学問領域は、例えば映画ほど注目を浴びるわけではない。偏狭なヒンドゥー教徒たちの怒りをかう映画監督や俳優が受けるほどの脅迫を受けるわけではない。中傷メールをCCで同僚、同業者に送り付けて恥をかかせようとしているのだが、恥知らずは中傷メールを送りつける方である。

それでも、同時に行われている教科書へのヒンドゥー至上主義的書き換えとともに影響には危惧せざるを得ない。また、インド内外のヒンドゥー至上主義団体が連携して、国内外で活発に運動を行っていることは留意すべきであろう。彼らが目指すのは、ヒンドゥーとしての誇りである。牛保護の執念は、インド国内の視点でみるとムスリム憎悪の裏返しであるように見えるが、牛の産物の薬効追及は、それにとどまらず、世界の中心であるヒンドゥーのインドの復活への願望を秘めているのかもしれない。科学の源泉が古代インドにあるというインド中心史観、誇りをもつことのできる歴史は、信仰と神話の領域である。センをナランダー大学から遠ざけ、ドニガーの本を回収させ、ナンダを個人攻撃するのは、彼らがヒンドゥー至上主義者の盲目的な信仰に対して論理的に批判するからであろう。論理的な批判に対して、論理で反論すべきところを、感情的に攻撃する。攻撃に訴えるかぎり、妬みは解決しえず永続するのである。最後にドニガーのもとで研究した南アジア研究者 Malarvizhi Jayanth の指摘を紹介したい。

ドニガーの学識はヒンドゥー右派の過去の歴史への嘘を解明する。神話的な黄金の過去を信じるヒンドゥー右派にとって、彼女は脅威となりうる。ヒンドゥー右派、その暴力といじめの歴史、そして歴史の恐れが、彼女への攻撃の原因である。ヒンドゥー右派は過去を盗み、現在を狭め、暴力的な未来と創ろうとする。彼女の学識はそうした彼らの努力に対する勇気ある返答であるから、彼らは彼女を恐れ、彼女を黙らせ、仕事を非難する。だからこそ、私たちは彼女の言うことに耳を傾け、神話を歴史に置き換えようとするヒンドゥー右派の試みに抵抗し続けなければならない。(Trivedi [2014a], p.123).

参考文献

- 辛島昇ほか監修 [2012], 『[新版] 南アジアを知る事典』平凡社
- セン, アマルティア, 佐藤宏・栗屋利江訳 [2009], 『議論好きなインド人』明石書店
- セン, アマルティア, 山形浩生訳 [2016], 「ナーランダー大学について」『インドから考える 子どもたちが微笑む世界へ』NTT 出版
- 中島岳志 [2005], 『ナショナリズムと宗教 現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』春風社
- 馬内里美 [2017], 「モディ政権下の高等教育機関へのヒンドゥー・ナショナリズム的介入 - 雑誌 Frontline の記事から -」, 東北文化学園大学総合政策学部紀要『総合政策論集』第16巻第1号, pp.161-178.
- Ali, Feroz and Monandas, Shweta [2017], The compulsive patent hoarding disorder, The Hindu, March 24, 2017, <https://www.thehindu.com/todays-paper/tp-opinion/the-compulsive-patent-hoarding-disorder/article17625538.ece> [2017/12/17 アクセス]
- Chattopadhyay, Suhrid Sankar [2017], “Beeping out Amartya Sen” Frontline. Vol.34 No.16, pp.103-106.
- Chowdhury, Shreya Roy [2017], “‘It is a closed place’: Why students are quitting Nalanda University”, Scroll in, Oct.29, 2017, <http://scroll.in/article/854841/it-is-a-closed-place-why-students-are-leaving-nalanda-university> [2017/11/10 アクセス]
- Doniger, Wendy [2010], The Hindus: An Alternative History, Oxford University Press, New York
- Doniger, Wendy [2014], “India: Censorship by the Batra Brigade”, The New York Review of Books, May 8, 2014, <http://www.nybooks.com/articles/2014/05/08/india-censorship-batra-brigade> [2017/12/3 アクセス]
- Katakam, Anupama [2014], “Distorted lessons”, Frontline. Vol.31 No.16, pp.119-121
- Katakam, Anupama [2015], “Saffronised censor”, Frontline. Vol.32 No.3, pp.41-43.
- Nanda, Meera [2016], “ Hindutva’s Science Envy”, Frontline. Vol.33No.18, pp.45-52.
- Noorani, A.G. [2014], “Penguin & the Parivar”, Frontline. Vol.31 No.6, pp.100-103.
- Prabhala, Achal, and Krishnaswamy, Sudhir [2016], “Mr. Modi, Don’t Patent Cow Urine”, The New York Times, June 16, 2016, <https://www.nytimes.com/2016/06/17/opinion/mr-modi-dont-patent-cow-urine.html> (2017/12/17 アクセス)
- Ranachandran, R. [2016], “Of ‘cowpathy’ & its mniracles”, Frontline. Vol.33 No.17, pp.35-38.
- Sen, Amartya [2015], “In full: Amartya Sen’s Nalanda University Resignation Letter”, The Wall Street Journal, Feb.22, 2015, <http://blogs.wsj.com/indiarealtime/2015/02/22/in-full-amartya-sens-nalanda-university-resignation-letter/> [2017/11/20 アクセス]
- Tripathi, Purunima S. [2017], “Intrusion into academic space”, Frontline. Vol.34 No.1, pp.30-31.
- Trivedi, Divya [2014a], “In their bad books”, Frontline.Vol.31No.4, pp.121-123.
- Trivedi, Divya [2014b], “Orgy of myth making”, Frontline. Vol.31No.23, pp.97-100.
- Trivedi, Divya [2016], “Intolerance unplugged”, Frontline. Vol.33No.20, pp.34-36.

Venkatesan, V. [2014], "A legal flaw", *Frontline*. Vol.31No.4, pp.124-125.

The Wire staff [2017a], "Remove Riots, English, and Urdu Words, and Praise of Mughals from Textbooks: Dinanath Batra", *The Wire*, July 24, 2017, <https://thewire.in/160977/dinanath-batra-textbooks-ncert/> [2017/8/8アクセス]

The Wire staff [2017b], "Mughals Are Out as Maharashtra History Textbooks Turn State-Centric", *The Wire*, August 7, 2017, <https://thewire.in/165360/Maharashtra-education-board-removes-traces-mughals-history-textbooks/> [2017/8/8アクセス]